様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２９４３

研究課題名（和文）李卓吾批評の戯曲作品における評語の研究

研究課題名（英文）A study on the key comments from Li Zhuowu's works on opera

研究代表者
ＦＡＮ　ＫＥＲＥＮ（Fan, Keren）

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：８０８４８０４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：
本研究は明の万暦年間の頃に刊行された「李卓吾先生批評」を冠した一連の戯曲作品における批評、とりわけこれらの作品に頻繁に使われている短評である「好」「妙」「画」の使い方や共通性の有無について、圏点の付け方や総評などと結び付けながら考察を行った。
その結果、「好」「妙」「画」及びこれらに関わりのある評語の作品・作品群ごとの使い方や共通性の有無がある程度明確化された。しかし、これらの評語の使用基準を精確に区別することはできないことが分かった。このことについて、版本問題や批評者問題の角度から推測を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
関連する従来の研究は、主に一部の作品の総評や総批から見られる「李卓吾」の作品に対する見解を分析し、版本もしくは批評者問題を論じることが多いが、「李卓吾批評」の特徴や性質を掴むには、未だ不十分である。
そこで、本研究は特に従来詳しく考察されていない短評を取り入れて細かく比較・分析することによって、これらの作品に高く評価されている内容の特徴、共通点の有無、そして批評者問題を新たな角度から検討した点で意義があると考える。また、研究対象となる作品には現在でも舞台や教科書に登場する名作が多々あるため、本研究はこれらの作品の明代における受容を理解する上で、一側面を提供できたかと考える。

研究成果の概要（英文）：
The Study focus mainly on the criticism in a series of opera works of "Li Zhuowu’s criticism" published during Wanli period of Ming Dynasty in China. It focus mainly on the usage of short comments such as "good", "wonderful", and "vivid" witch is frequently used in these works, and the issues of commonalities, etc. And the examination was held combined with the use of annotation marks in the works and the overall comment.
Through the examination, the usage of "good", "wonderful", "vivid" and related comments in various works and series, as well as their commonalities, have been clarified in certain extend. However, the criteria for use of these comments cannot be distinguished accurately. The Study delivers the speculations from the perspectives of version and critic issues.

研究分野：中国文学

キーワード：李卓吾　戯曲　批評　容与堂

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

中国では、文学作品を批評する行為は経典の箋注に由来し、その後詩文、小説、戯曲に及んだ。戯曲作品はその成立が詩文より遅いため、それを批評する専門書や批評の付された戯曲作品の出版が盛んになったのは明代に入ってからである。

批評付きの戯曲は「李卓吾先生」の批評が付される戯曲作品が出版された万暦三十八年(1610)以前にもすでに世に出ていたが、「李卓吾先生」の名を冠したこれらの作品に見られる批評は従来の音注や語釈にごく一部の評語が挟まれる形とは違い、「好」「妙」「画」などの一字の眉批・夾批から数十字の眉批・総批まで豊富な種類の批評を用い、批判的な態度で作品の内容に評価を付けることに力点を置いた。その独特な批評ぶりや評語の内容はのちに出版された戯曲作品に多く借用された。

「李卓吾先生」の批評付きの戯曲や小説は実際には李卓吾本人が批評を付けたかどうか定かではないが、出版状況を見ると小説では『水滸伝』『西遊記』『三国志演義』、戯曲では、容与堂によって『西廂記』『琵琶記』『紅拂記』『幽閨記』『玉合記』という五つの作品が刊行された後、さらに十種以上の戯曲作品が刊行されたことから、当時「李卓吾」の批評が人気を博したことは間違いない。

上述したこれらの作品には中国文学史において重要な位置を占めるものが多く、従来研究者の注目を浴びてきた。作品の受容研究、版本研究、文学批評研究、そして出版文化に関する研究にしばしば取り上げられた。これらの研究は一、二作を取り上げ、「李卓吾」の総批や長い評語に着目して版本問題や批評者問題などを論じるものがほとんどである。

しかし、これらの作品に最も多く使われている批評は総批のような比較的長い評語ではなく、行間や眉欄といった本文と緊密に関わるところに付されている一、二文字の短評である。それらの短評は物語の展開に沿って批評者の考えを随時に反映する大きな役割を担っているにも関わらず、批評される内容の特徴や共通性の有無、そしてそこから窺われる批評者の態度や視点については、従来体系的な研究が行われていなかったため、より深く考察し、批評研究をはじめとする複数の研究分野に新たな視点を提供できる余地があったことが当時の背景としてある。

２．研究の目的

本研究の目的は上述した「李卓吾先生」の批評が付される戯曲作品に着目し、これらの作品における批評、特に本文と密接な関係にある短評は作品のどの部分に対して付けられているのか、そこに反映された批評者の作品に対する視点・考えはどのようなものなのか、それぞれの批評は各作品における使い方が同じなのかを圏点の付け方や総評などと結び付けつつ解明し、「李卓吾批評」の特徴や性質をより深く理解することにある。

また、各作品の評語の付け方の共通性を分析することは批評者問題の検証にも繋がり、「李卓吾先生批評」の作品はすべて同一人物が批評を付けたかどうかについて、新たな角度から検討できる。

３．研究の方法

「李卓吾先生」の名を冠した戯曲作品群は出版順に大まかに以下の三つのグループに分類することができる。第一群は容与堂によって刊行された『西廂記』『琵琶記』『紅拂記』『幽閨記』『玉合記』の五つの作品である。第二群は「二刻五種伝奇」として刊行されたと推測される『荊釵記』『明珠記』『玉玦記』『繡襦記』『玉簪記』の五つの作品、続いて第三群は「三刻五種伝奇」として刊行されたと考えられる『浣紗記』『金印記』『香囊記』『錦箋記』『鳴鳳記』の五つの作品である。

第一群の五つの作品は刊行時期が作品群においてもっとも早い。評語の付け方が一致しているかどうかを検証するために、同書坊によって刊行された『李卓吾先生批評忠義水滸伝』に見られる批評に関する先行研究を参考として活用できるため、最優先に考察する対象にした。

そのため、本研究においては、まず第一群の五つの戯曲作品に見られる批評を集め、中でも特に眉批・夾批は作品のどの部分に付されるのか、批評者のどのような考え・視点を反映しているのかを詳しく考察し、総評、齣批や圏点との関係を考慮しつつ、その特徴を分析した。次に、この五つの戯曲作品に見られる批評の特徴を比較し、そこに反映された批評者の視点が共通するものであるか否かを検証し、さらに『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の批評に関する先行研究の考察結果と比較し、「李卓吾先生」の批評ぶりに作品のジャンル、もしくは作品の題材によって違いが見られるかどうかを考察した。

第一群の作品に考察を加えた後、第二群より先に第三群の戯曲作品について考察を行う。現在「三刻五種伝奇」として『浣紗記』『金印記』『香囊記』『繡襦記』『鳴鳳記』の五つの作品が台湾国家図書館に所蔵されているが、『浣紗記』の前に付される「三刻五種伝奇総評」によると、「三

刻」された作品には『繡襦記』ではなく、『錦箋記』が含まれるはずであったことが分かる。そのため、以上の六つの作品を一つのグループとして、第一群の戯曲作品に対する考察方法を使用し、第三群の作品に見られる「李卓吾先生」の批評を分析して第一群の考察結果と比較した。

最後に、残りの第二群の作品に考察を加える。「李卓吾」の批評が付される『荊釵記』『明珠記』『玉玦記』『繡襦記』『玉簪記』が「二刻五種伝奇」として刊行されたと推測されているが、「二刻」と明記されていないため、真偽は定かではない。以上の五つ作品のうち、『玉玦記』の所在は不明であるため、『荊釵記』『明珠記』『玉簪記』について同様の考察方法を用いて考察し、第三群の『繡襦記』の考察結果と結び付けて第二群の戯曲作品に見られる「李卓吾」の批評ぶりや評語の特徴をまとめた。その上で、これまで述べた各作品の批評の考察結果を踏まえ、批評者が同一人物であるかどうかという問題を含めて「李卓吾先生批評」を冠した戯曲作品群に見られる批評の特徴や役割を総合的に考えた。

４．研究成果

第一群の五つの作品『西廂記』『琵琶記』『紅拂記』『幽閨記』『玉合記』における批評を抽出し、整理した結果、もっとも多く使われている評語は「妙」及びそれに関わる評語であることが分かった。

そこで、これらの評語は、作品のどの部分に付されるのか、批評者のどのような考え・視点を反映しているのかを詳しく考察し、総評や圏点との関係を考慮しつつ、その特徴及び共通点の有無を分析した。

容与堂刊行のこれらの戯曲作品において、「妙」は数が多い作品ほど、様々な種類の描写に付される傾向が強く、さらに、「妙」の次に最も多く使われている「画」と関わりのある評語の特徴や使用基準に着目し、同じく素晴らしい描写に使われている「妙」と「画」の評語はどのように使い分けされているのかに考察を加えたところ、両者の区別が明確につかないことが多いことが分かった。これらの作品と同書坊刊行の『水滸伝』における「妙」と「画」の使い方を比較しても、はっきりと使い分けされているとは言えない。そのため、これらの批評が同一人物の手によるものであれば、「妙」と「画」の区別をはっきりと意識することなく所々に評語を付けたのではないかと思われる。

一方、同一作品の中で、批評の基準のずれが窺えることを踏まえると、容与堂刊のこれらの作品における批評、特に素晴らしい描写を批評する「妙」や「画」などの簡単な評語は批評者の「李卓吾」の観点をアピールするために、他人によって多く入れられたと推測した。

次に、第一群、第二群の作品ののちに刊行された『三刻五種伝奇』における短評を中心に研究を行った。

研究方法としては、上と同様、まず各戯曲作品における短評を抽出し、分析を行った。第一群の五つの作品では最も多く使われているのは「妙」と関わりのある評語であるが、『三刻五種伝奇』ではそれが「好」と関わりのある評語に当たる。これらの評語は作品のどの部分に付されるのか、批評者のどのような考え・視点を反映しているのかを詳しく考察し、総評や圏点との関係を考慮しつつ、その特徴及び共通点の有無を検討したうえ、各作品における「妙」と「画」と関わりのある評語の特徴や使用基準は『初刻五種伝奇』とは相違点があるかどうかについても分析した。

『三刻五種伝奇』で最も多く使われている「好」は、主役の恋愛感情や主役の家族間の愛情描写に比較的多く付されている一方、国間の戦争や政治闘争の内容が比較的に多い『浣紗記』『鳴鳳記』では、忠臣義士や奸臣の言動にも付される傾向がある。また、『初刻五種伝奇』における「妙」の傾向と同様に、『三刻五種伝奇』における「好」も、使用数が多い作品ほど様々な種類の描写に付される傾向が強い。

また、ほとんどが曲文に付されている「好」は、人物の感情をうまく描いていることを批評するために用いられることが多い。その一方、「妙」はその一部が「好」と同様に人物の感情をうまく描いていることを批評するために用いられているが、科白に付されることが「好」より多く、分かりやすい言葉で真に迫る内容を評価する傾向が見受けられる。

一方、「画」と関わりのある評語に関しては、特に一文字の「画」はすべて脇役の小人物そのものに関する描写に付されている。これに対し、『初刻五種伝奇』における「画」は、小人物の描写ではなく男女の恋愛感情に関する描写に付されるものが大半であるため、同じ評語であっても、作品によってその着目点が異なる場合があるということが考察を通して分かった。

また、『三刻五種伝奇』では、齣末の総評と文中の短評が呼応していない現象が見受けられ、やはり第一群の作品に考察を加えた際にも指摘したように、「李卓吾先生批評」と題しているこれらの作品における批評が全て同一人物の手によるものであるとは考えにくいと述べた。

最後に、第一群の作品と第三群の作品の間に刊行したとされる数作の戯曲に着目し、それらの作品における短評の特徴や共通点を述べた上で、『初刻五種伝奇』と『三刻五種伝奇』の考察結果と結び付けながら、これまで論じてきた「李卓吾先生批評」を冠した作品における批評に関する問題を全体的に検討した。

これまでに考察してきたこれらの作品における「好」「妙」「画」のような評語はその批評対象が作品によって大まかな傾向が見受けられる場合はあるものの、全体として見ると、一貫していない。しかし、「画」は『初刻』では、男女主人公の愛情表現に多く付されているほか、様々な

内容に付されているのに対し、『三刻』では、すべて小人物の描写に付されているため、使い方が統一されているという見方ができる。

もう一つ注目に値するのは各作の齣末に付されている総批の数にばらつきが大きいところである。このことについて、『李卓吾先生批評荊釵記』に見られる校勘に関する評語をはじめ、李卓吾本人やその知人が残した記録から、「李卓吾先生批評」を冠したこれらの作品は幾度と刊行されるにつれ、その元の姿とは離れていき、そのために総批も一部欠落することになったのではないかと推測した。また、総批の欠落は「好」「妙」のような素晴らしさを批評する評語が一体どのような視点をもとに批評しているのかを明確にできないことにも関係していると指摘した。

さらに、上の分析に基づき、李卓吾本人が批評した戯曲は原文に手が加えられており、その評語がより論理的であるはずだと推測し、「好」「妙」のような評語が頻繁に使われているこれらの作品はうまく李卓吾本人の作品に対する態度を反映しているとは言い難いと述べた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 樊可人	４．巻 211
２．論文標題 『二刻五種伝奇』における評語について―『初刻五種伝奇』『三刻五種伝奇』との比較を兼ねて―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人文研究	６．最初と最後の頁 1，22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樊可人	４．巻 208
２．論文標題 『三刻五種伝奇』における評語について―「好」を中心に―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文研究	６．最初と最後の頁 43，75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樊可人	４．巻 205
２．論文標題 『初刻五種伝奇』における評語について―「妙」を中心に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文研究	６．最初と最後の頁 75，107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関